六　ゾンビ生出演

「それでは、この緊急事態にどのように、私たちとしてはどう対応すべきなのか議論してまいりましょう。まず、このままでは、この国全体がゾンビ化してしまう恐れがありますがどうでしょうか？ご意見のある方はお考えをおっしゃってください」

　とりあえず、司会者は話題を振る。

「ふん。心配しないでも、今のこの社会は既にゾンビ化していますよ」

　最初に、口火を切ったのは現実先生。天井を見つめながら、我関せずと、口をへの字にして吐き捨てるように呟いたものの、

「あっ、いけない」と言葉と一緒に噛んでいたガムが口から飛び出た。飛び出たガムは放物線を描き、床を汚すことなく、司会者の靴に無事に不時着した。その放物線の行方を確認した司会者は、一瞬、ムッとするものの、自分の方にカメラが向けられたことに気付くと、発言内容と同じで大当たりですね、と笑みを浮かべながらガムをつまむ。カメラはアイドルに向けられた瞬間、ゾンビのような顔で現実先生を睨む。現実先生は顔と体を斜に構えて、それこそ、我関せずの態度だ。

「そうなんですよ。あたしはゾンビが大好きなんです。手首や足首が反対に曲がったり、体を半分に切られても立ち上がるところなんて、生への執着心に本当に憧れます。あたしも、何度、アイドルの座を滑り落ちそうになったことやら。この粘り強さをぜひ、芸能生活に活かしていきたいと思います。また、、ゾンビの呼吸方法やゾンビの体の動かし方もマスターして、今の、ストレス社会を克服のため、皆さんのためにお役に立ちたいです」

　もう既にアイドルの座から座布団を取られ、座布団を運ぶ役目になった笑点の山田君になったにも関わらず、ゾンビを愛するゾンビガールが、聞かれもしないのに、目から流れ星マークを飛ばしながら、両手をがっちりと握り締め、星に願いを込める。もちろん、ここはスタジオ。天井には星ではなく、照明器具が願いを拒否するかのように煌々と出演者を照らしている。

「だから、祟りと言ったじゃろ。この祟りを除くためには除霊しかないんじゃ。このテレビを観ている人々は、今、すぐに、除霊のための募金活動に協力するんじゃ。ゾンビが最も恐れるのは饅頭ではないんじゃ。饅頭怖いじゃないぞ。金だ。金はゾンビさえも恐れるものじゃ。金の光輝く神々しさにゾンビは触れ伏すのじゃ。そのために、わしに金を預けて欲しい。わしはその金の力で、この国中からゾンビを追い払ってやる。どうぞ、光り輝くわしにお金を！今から、送金先

を言うから、そこに連絡してくれ。０１２０―１１９２―４１８０だ。０１２０、いいくに　しよう。どうじゃ、覚えやすいじゃろ。０１２０だから、電話料金はいらんぞ。電話料金はわしの負担じゃ。

　更に、インターネットでも募集しているぞ。クラウドファンタスティクというのか？ほっといても、インターネットに掲載するだけでお金が集まるなんて、なんてファンタスティクじゃないか。

　何、ファンタスティクの意味を知っているのかだって？わしを山の中に籠っている田舎者だから知らないと思っているのか。わしが住んでいるところにもちゃんと自動販売機があって、お金を入れてボタンを押せばジュースが出てくるぞ。あの、ぶとうやみかんのジュースは美味しいなあ。炭酸か、あれが入っているから、喉がすっきりするんじゃ。まさに、ファンタスティクじゃ。

　それに、お金が怖いと言っているのはわしじゃないぞ。ゾンビの言葉じゃ。ゾンビの霊がわしに乗り移っているんじゃ。ああ、こわ。ああ、こわ、光輝く金塊が恐いわ。お金なら紙幣でも硬貨でも恐いわ。できれば、数字が大きい紙幣が一番怖いわ。どうじゃ、わしがゾンビの本音をわずかだが聞いてやったぞ。今のうちじゃ、ゾンビがわしに乗り移っているうちに、ゾンビたちの本音をもっと聞きだすんじゃ。ああ、時間がない。お金が恐い」

　金の亡者の、祟りおばさんは席を立つとフロアーの中央に蹲ってしまった。カメラがどの出演者を映そうとも、必ず映る位置に座ったのだった。

「だから、言っているだろう。こういう詐欺まがいの奴らが、オレオレ詐欺だとか、まごまご詐欺だとか、選手としてたいした実績はないけれど、異様に政治力だけは長けている団体の長の長期政権による、オレオレ会長がこの社会を駄目にしているんだ。まさに、人の心や懐に巣食うゾンビだよ。目の前にいるゾンビをいくら駆除しても、人間の心の中にいるゾンビを駆除しないと、ゾンビはいつだって現れるんだよ。実体のゾンビなんかはいないんだよ。

　何回でも言うけれど、死んだ人間が生き返るわけなんかないんだよ。そんなんだったら、医者なんかいらないよ。病気になったら、すぐに死んで、生き返った方が安くつくだろう。死んだら、肉や魚や野菜や果物なんて食べる必要はないんだ。なんて、エコなことか。これで、地球の資源問題は解決するぞ。みんな、ゾンビになれ。あれ、主張しているうちに俺はゾンビになることを称賛しているぞ。とにかく、人間の欲望が、恐怖心がゾンビを生み出しているだけなんだよ」

　常に、自分は蚊帳の外に置き、当事者意識のない現実教授はズボンのポケットに手を突っ込んで、口笛を吹きだした。坂本九の「上を向いて歩こう」の曲だった。空を見上げていれば、目の前を現実は見ずにすむということを体現していた。

「あっ、この歌、好き」

　ゾンビガールがすぐに反応する。一緒になって、口笛を吹きだした。アイドルだけに、現場の雰囲気、風を読むのが上手かった。常に、どんな話題に対しても端っこでもいいから話題の中に入っていること。これがアイドルのプロダクションの社長の教えであり、それを体現しているのであった。まさに、風見鶏ガールの躍如だ。

「いや、実体はあります。心の中にあること自体が実体なんです。これまで、人類は、願望や欲望を、もう少し平たく言えば、したいこと、あったらいいこと、を現実化、実体化してきたんです。つまり、心の中で思うことは、それだけで、実体化と言っても言い過ぎじゃありません。それが、人類の文化です。脳の拡大化こそが、文化なのです。つまり、ゾンビはいる。そして、それは、亡くなった祖父や祖母、父や母、近親者、友人、妻、など、愛する人々への愛なのです。愛の結晶がゾンビなのです」

　全ての出来事を文化の一言で片づけてしまう人類学者が訥々とだが、顔を上げずに、誰の顔も凝視せずに、白い机の上を見つめながらしゃべっている。彼は共感を求めない文化の信奉者のようだ。

「だから、言ってるじゃろ。もっとお金を」

「だから、ゾンビを愛しているの」

「だから、ゾンビなんていないんだよ」

「だから、ゾンビは文化なんです」

　司会者が机をバンと叩くとその場に立ち上がった。

「だから、私は司会者だ。みんなが勝手なことをしゃべったら番組にならないでしょう」

　番組は出演者個人のそれぞれ勝手な主張と言うダンスでまさに終わろうとしていた時だ。

「きゃあ」

「わおー」

　誰かの頭のてっぺんから声が突き抜けるような悲鳴が響き渡った。髪の毛が三本落ちた・カメラは髪の毛の方を映さずに、その声のする方向をにパンした。そこには、無数のゾンビたちが、ラジオ体操ならぬ、ゾンビングダンスをしながら、出演者たちに向かってきていた。まさに、お呼びでないゾンビの生出演である。だが、テレビ局にとっては、視聴率を上げる神様のような存在だ。視聴率が一パーセントから五パーセント、十パーセント、端折って、五十パーセントと、滝の鯉のぼり、海の中のウナギのぼり、と上昇していく

「これは驚きです。出演を依頼していないにも関わらず、ゾンビたちがスタジオに現れました。生出演です。しかも、出演料は無料です」

　司会者がその場の雰囲気を掴み、台本にないセリフをしゃべり始めた。アナウンサー歴二十年。これまでは、思ってもいないことでも、台本だからと無理やりにデスクやプロデュ―サーからの命令で言わされていたが、今は、首輪がはずれた番犬のようにワンワンと吠えだした。

「さあ。ゾンビに突撃インタビューです」

　今まで、他の出演者たちの言い分ばかりを聞いていて、自分が目立っていないことを知っていたので、カメラのレンズの位置を確認しながら、ここぞとばかりにメインに躍り出る。そして、にこにこしながら、マイクを持ったままゾンビたちに近づこうとした。だが、プロデューサーとディレクターのひそひそ話が漏れ聞こえてきた。

「えっ、何？これ、やらせじゃないの？本物なの？そんなこと聞いていないよ」

　それまで、満面に笑みを浮かべていた司会者は、ゾンビを直視しながら、恐怖心が顔に現れていれば、ゾンビに襲われるのではないかと思い、決して俺はゾンビは怖くないんだと誇示するかのように、再び、満面に笑みを浮かべながら後ずさりをし始めた。

　司会者の手のひらならぬ顔面を一瞬で、笑顔から恐怖心へと、恐怖心から作り笑いへと司会者の態度を見て、出演者たちもそれなりに現在の状況を瞬時に把握して、それぞれの態度を取り始めた。

「あっちいけ、ゾンビ。わしを噛んだら、祟りがあるぞ。死んでも知らんぞ」と、真っ先に、恐山恐怖子がそれまでは足を引きずり、座り込んでいたはずなのに、ジャンプして立ち上がると、スタジオからダッシュして逃げようとする。年齢別百メートル競走の世界選手権なら金メダルを取れそうな身の素早さである。

「そこどけ。そこどけ。わしを邪魔する奴は祟りがあるぞ」と髪と棒を振り回す。だが、カメラ

のケーブルに足を取られて、うつ伏せに転んでしまった。年のせいですり足となり、足が上がらなくなったためだ。転んだ恐山にゾンビが山のように一斉に覆いかかる。黒山の人だかりならぬ、ゾンビだかり。いや、ゾンビ祟りだ。恐山恐怖子は亡くなった人を呼び戻してお金をたかる人騙り。恐山がゾンビ山になった。

「うぎゃあ」

　恐山の、金の切れ目が縁の切れ目のような断末魔の叫び声が聞こえた。

「きゃあ、うれしい。ゾンビちゃんだ。あたしも早くゾンビにして」

　ゾンビガールは、ここがアイドルの境目だと、自ら恐山のゾンビ山の中に捨身飼虎なら捨身飼ゾンビとしてダイビングした。

「こんなことは非科学的だ。俺は信じないぞ。ゾンビなんて信じないぞ」

　科学者の京東大学の現実教授は、目の前にゾンビが迫っているのに逃げようともしない。そして、「わあああ」と激しい声。

「ゾンビは信じないけれど、痛みは信じるぞ」の名言を残してゾンビとなった。

「俺は何もしていない。俺は何も言っていない。あんたらの悪口は言っていない。あんたらを利用していたのは、恐山だ。あんたらを信じていないのは現実教授だ。あんたらになりたがっているのはゾンビガールだ。あんたらの研究をしているのは文化人類学者だ。俺は、そいつらの話を聞いていただけだ。それも仕事だから仕方がないだろう。生きるためなんだ。まだ、子どもは大学生だ。仕送りもいるんだ。だから、嫌な仕事でも受けない千雄いけないんだ。あんたらだって、ゾンビになる前の人癌だったときは、そうだっただろう。家族のために、自分の人生を犠牲にしただろう。今は。俺も同じ境遇なんだ。だから、俺だけは見逃してくれ。他の奴を襲ってくれ。俺を見逃してくれたら、あんたらのことは決して悪くは言わない。いや、悪くどころか、先祖を敬いなさいと言う教えを普及させている、あんたらのことを、誉めってはちぎり、誉めってはちぎるよ。だから、許してくれ。助けてくれ」

　これまで、ゲストばかりにしゃべられていて鬱憤が溜まっていたのか、ここぞとばかりに過剰に饒舌になった司会者の公平公太郎。だが、いくら自己弁護しようと、ゾンビたちの耳には聞こえない。まさに、ゾンビの耳に言い訳だ。ゾンビの一体が公平公太郎の喉元に噛みついた。彼らは動いているものにしか興味がない。司会者が言い訳をしゃべればしゃべるほど、口が動き、それに伴い、喉が上下する。その上下運動に、ゲームセンターのモグラ叩きのようにゾンビは反応

するのだった。

　公平公太郎は、インタビューはできなかったものの、わあわああとアナウンサーとして最後のコメントを残した。それ以降は、喉を掻きむしられたために、声にならない声を出しながらも、ゾンビアナウンサーとして実況中継を続け始めた。まさに、アナウンサーの鏡のような、いや、鏡を見ればゾンビなので、ゾンビアナウンサーだった。

　他のゲストを始め、司会者やテレビ関係者たちは、逃げまどうものの、多勢に無勢の言葉通り、大量のゾンビに取り囲まれ、なすすべもなく、ゾンビと化していった。

　ゲストの中で唯一残った文化人類学者の郷土愛夫。ただし、ゾンビたちは、郷土が墓を掘っていた時の土の臭いに、同じゾンビだと勘違いをしてか、見向きもしなかった。そのため、学者先生は、地下鉄の通勤電車が駅に着いて、ドアが開いた瞬間、雪崩打つように電車のドアから出るサラリーマンたちの中で、田舎者なのか、降りる駅を間違えて、慌てて、電車に再び、乗ろうとしたものの、あまりの大勢の人の大波に抗うことができずに、どうすることもできないまま、東映の映画の冒頭シーンに出てくる波に打たれ続ける石のように、そこにじっと佇んでいたのだった。

　だが、それが幸いしたのか、ゾンビたちは文化人類学者の臭いは嗅ぐものの、犬がおしっこをひっかける電信柱や家の角の塀のように、自分の安住の地に安心して横を通り過ぎていった。
そう。何か身を任せるのも、何かに抵抗し続けるのも、文化だと言わんばかりに。

　郷土は彷徨っていた。日本全国を自転車で回っていた。手にはカメラを持ち、ゾンビの姿を映していた。彼はテレビ放映中にゾンビの大群が現れたものの、どういう訳か、ゾンビたちは彼には目もくれずに、他の出演者やテレビ局のスタッフのみに襲い掛かったのだった。彼は襲われる出演者等を横目に見ながら、テレビ局を出ると、ゾンビ出現の謎を解くために、全国の現地調査に出掛けたのだった。本来ならば、車で行きたかったが、高速道路や国道、県道、市道、私道、突き当り道、迷路道などは、ゾンビに襲われた車が停車したままで、思う様に車での移動は困難な状況だった。

「ここもか」

　郷土は自転車を止めると、スマホで現場の写真を撮影した。ゾンビたちは人間を襲うものの、お墓で花を活け、ろうそくを灯し、線香に火を点けるなど、墓参りをしている人は決して襲わなかった。また、墓参りに行こうと、バケツに組花をいれ、手には数珠などを持っている家族も

襲わなかった。また、墓参りが終わった後、自宅に帰って来て、お茶と飲んで、お墓に供えていた饅頭を食べながら一服している人たちも襲わなかった。

　なぜ、なぜなんだ。

　郷土は頭をぐるぐると回す。少しでも血の巡りをよくするためだ。だが、頭を回しすぎると返って気分が悪くなり、知の巡りが悪くなることも知った。少し、落ち着いた後、注意深くゾンビの行動を見守る。そして、あることに気付いた。ゾンビたちは人間に近づくと、必ず、人間が持っている物とを凝視するとともに、匂いを嗅いでいた。そうか。そうだったんだ。

　ゾンビはお供えの花を見たり、線香の匂いを嗅いでいたんだ。そうした人間は決して襲おうとはしなかった。

　また、ある町では、先祖供養のために、盆踊りを踊っていた。そのように盆踊りに参加している人や運営に携わっている人たちもゾンビは襲わなかった。

　郷土は、ゾンビの出現に、お墓参りと盆踊りが関係しているのではないかと仮説を立てた。だが、何故、お墓参りをしている人や盆踊りをしている人が襲われないのか、その理由まではまだわからなかった。とにかく、この事実、この現象を全国の人に知らさなければと思い立つ。すぐさま、お墓の近くには近寄らないゾンビたちやお墓参りに行こうとしている人やし終わった人を無視するゾンビたち、盆踊りには踊るものの、盆踊りに参加している人には決して襲わないゾンビたちを写真に撮影し、ＳＮＳにアップした。題名は「ゾンビから逃れる八十八の方法」

　本当は、二つしか方法は述べていないのだが、インパクトを与えるために、あえて八十八とした。それに、八は末広がりだ。末広がりが二つもあるなんて、広がりが拡大されていい。それに、四国のお遍路さんは八十八か所のお寺を巡る。夏は近づき茶摘みは八十八夜だ。つまり、収穫祭だ。ああ、なんて、八十八は素晴らしいんだ、

　このＳＮＳへの投稿はすぐに拡散し、超助かった！が押され、神様・仏様・郷土様のメッセージと共に、全国民にシェアされた。この記事を見た人々は、我先にとお墓詣りに出掛けるとともに、自宅に帰ると仏壇にろうそくを灯し、線香に火を点けた。その結果、そこはかとなく線香の匂いがする家には、蚊取り線香の煙に蚊が近づかないように、ゾンビたちは避けるように行進した。ゾンビは線香には弱いという仮説が論証されたわけだ。

　また、お墓や家に仏壇がない人は、地域の盆踊り大会に我先にと進んで参加した。そして、そこの地域の盆踊りが終わると残念と呟きながら、スマホでネットサーフィンして、縁もゆかりもない町の盆踊り大会に参加した。まさに、渡り鳥ならぬ渡り盆踊り人となった。おかげで、どの町

の盆踊り大会も盛況に終えることができた。ただし、盆踊りをやめるとゾンビに襲われるために、盆踊り大会はやめることをできなくなってしまった。そのため、渡り盆踊り人はわざわざ遠くの盆踊り大会に参加することなく、そこの地域で、平均的な参加人数の下、盆踊り大会で踊り続けた。

郷土は永遠に続くと思われる全国各地の盆踊り大会を訪れ、この状況をＳＮＳにつぶさにアップし続けた。確かに、今は、何故、ゾンビが盆踊りを踊るのか、その原因はわからず、また、ゾンビを退散させる方法も見つからないものの、数多くの実例を集めれば、そのうちに、何かヒントが掴めるかもしれないと考えたのだった。ゾンビを求めて三千里、三千の盆踊り。今日も、郷土のゾンビを求める旅は、ＳＮＳにアップし続ける旅は続く。